

特集陳列

# 葵祭の 美術

—千年の伝統—

The Aoi Festival:  
A Thousand-Year Tradition

2015年  
4月21日(火)～5月31日(日)  
【平成知新館 1F～2F】



## 葵祭の歴史

葵祭は、古くは賀茂祭と言われ、五月十五日（旧暦四月の中酉の日・二十十二支を用いる日付法では、十二日毎に酉の日が来るため、月に二～三度酉の日があります）

中酉はその中間、二の酉の年は下の酉の日になります）に行われる賀茂御祖神社（下鴨神社）と賀茂別雷神社（上

賀茂神社）の例祭を指します。

葵祭は、祇園祭・時代祭と並んで京都三大祭と称されますが、京都三大祭の中でも最も古く、平安時代では「祭」と言えば葵祭を指したほどでした。

「葵祭」の呼称は、賀茂社の神紋となつてゐる「一葉葵」を祭儀の装飾に用いたことに由来しますが、その呼称の定着は遅く、元禄七年（一六九四）の再興以後とされています。

さて、賀茂社の由来は古く、下鴨神社はその名の通り、上賀茂神社の祭神である賀茂別雷命の母である玉依媛命（たまよりひめのみこと）と玉依媛命の父・賀茂建角身命（かともたけづねのみこと）を祀ります。賀茂建角身命は、神武天皇の東征を助けたといい、その子孫が両社の祭祀を継承した賀茂氏とされています。賀茂氏は、両社一帯の地を勢力圏とした大和朝廷に仕えた豪族でした。

このような賀茂社の歴史に相応しく、葵祭も悠久の歴史を持っています。六世紀に鴨の神の崇りで飢餓疫病が蔓延したことを機に行われるようになつたと伝えられています。走馬の神事は草創期からあつたようですが（『本朝月令』所引『秦氏本系帳』逸文）、それが展開する形で早くから祭日には騎射も行われるようになつたと見られ、現在でも下鴨神社の流鏑馬神事にその名残を見ることがあります。『続日本紀』文武天皇二年（六九八）三月二十一日条に「山背国賀茂祭の日、会衆騎射を禁ず」とあります。恐らく混乱を防止するためと思われますが、群衆が集まることを禁止していますので、七世紀末には相当の規模に発展していたことがわかります。

奈良時代に入ると、山城国司の臨検下に置かれ（『続日本紀』和銅四年（七一二）四月二十日条）、その後、国司の行う國祭となつたと見られます。後に賀茂社は山城国

の一宮として遇されるようになりますが、賀茂祭は、賀茂氏の祭祀から官祭へと変貌を遂げるのです。その意味で、葵祭（路頭の儀）の前日（中申の日）に行われていた賀茂国祭は葵祭の一世代前の姿をとどめたものと言えます。

平城京から長岡京を経て平安京へと、奈良から京都に都が遷ると、賀茂社は王城鎮護の神として朝廷から篤く尊信されるようになりました。

大同元年（八〇六）、賀茂祭が始まったという記録があり（『一代要記』・『皇年代略記』）、これを勅祭の開始とする説もあります。後述するように賀茂祭は弘仁十年（八一九）に中祀へと昇格されますが、弘仁九年以前に原形が成立したと見られる『内裏儀式』に「賀茂祭日警固式」が登場しますので、それ以前から官祭となっていたのは事実のようです。

翌大同二年五月には、賀茂両社の主祭神である賀茂御祖神・賀茂別雷神に正一位の神位を朝廷から授与され（『日本紀略』）、賀茂社の格式はここに定まります。

弘仁元年（八一〇）、嵯峨天皇は、薬子の変の際に賀茂神に戦勝祈願した返礼として皇女・有智子内親王を賀茂社奉祀のため斎院に任じたとされますが（『本朝月令』・『一代要記』）、実際に斎院司という役所が設置されるのは弘仁九年のことになります（『類聚三代格』卷四他）。以降、皇女・王女が歴代の斎王となり、賀茂斎院は伊勢斎宮と並ぶに至りました。

賀茂斎院は、その後、朝廷の衰微によつて承久の乱（一二二二年）を契機に断絶しますが、現在、葵祭では、毎年、未婚の女性を斎王代に選抜して、かつての斎王に代わつて神事を掌らせており、十二単に身を包んだ華やかな姿で話題を集めています。賀茂斎院は、地名をとつて紫野斎院とも呼ばれたように、現在の上京区上御靈前通大宮西入近辺に置かれ（櫟谷七野神社内に賀茂斎院跡石碑）、斎王はここで清浄の生活を営みながら、神事に従事したのです。



そして、弘仁十年、葵祭は中祀に准じる勅祭となります（『類聚国史』卷五）。大祀は天皇即位の時の大嘗祭のみですから、中祀とは実質的に平時最高格の国家祭祀ということになります。先述の『内裏儀式』では勅使の件は登場しませんでしたが、弘仁十二年の『内裏式』では登場しますので、勅使派遣もこの中祀昇格を契機としたのでしょう。現在、葵祭は、石清水祭、春日祭と並んで三勅祭と言われ、平安時代の古式を今日に伝えていましたが、その中でも最も古いものです。ですから、葵祭の行列では、つい華やかな斎王代に目が奪われがちですが、より重要なのはこの勅使の行列なのです。賀茂齋院が絶えても、葵祭 자체が滅びなかつたのはこれによります。

寛治七年（一〇九三）、堀河天皇が、宮中武徳殿で旧暦五月五日の節句に行われていた競馬の儀を、上賀茂神社に移したと伝えられています。これが名高い賀茂競馬の始まりで、現在でも上賀茂神社で新暦五月五日行われています。本来は、葵祭の後に行われた節句の別儀ですが、時期も近いことから、早くから一体の見所として親しまれました。現在では前後関係が逆転して葵祭の前儀として行われています。

このようにして、平安京の風物詩として定着した葵祭ですが、応仁の乱（一四六七年）以降の朝廷及び室町幕府の衰微や戦国時代にかけて賀茂社の荘園が有名無実化したこともあり、祭儀の経費負担に耐えられなくなります。文亀二年（一五〇二）以降、約二百年近く勅使の行列（路頭の儀）は中絶を余儀なくされるに至り、賀茂社だけで神祭が行われました。

近世、徳川幕府のもとで世相が安定すると、賀茂社も早々に社殿が復興されます。賀茂社は、寛永五年（一六二八）に造替され、そのほとんどの建物を今日に伝えており、上賀茂神社では四十一棟が、下鴨神社では五十三棟が重要文化財に指定されています。本殿のみは、平安時代中期以来、原則二十一年毎に式年遷宮を行なうこ

とから両社共に文久三年（一八六三）の建物が残されており、国宝指定されています。本殿が国宝に指定されているため、現在の式年遷宮では修理という形式を取っています。平成二十七年は第四十二回目の式年遷宮に当たります。

葵祭の勅使行列も、元禄七年（一六九四）に靈元上皇や江戸幕府の後援で漸く復興されるに至ります。周知のように、賀茂社の神紋は二葉葵、一方、徳川将軍家の家紋は三葉葵で、賀茂氏と所縁があるともされたので、幕府の庇護を被つたのです。葵祭と呼ばれ始めたのは、実際にこれ以降なのです。

明治維新、葵祭も激動の時期を迎えます。明治元年（一八六八）の東京奠都や皇室祭祀の改革により、明治元年から明治十六年まで勅使行列は中止されます。賀茂社関係者の尽力で、明治十六年一月、岩倉具視によって賀茂祭旧儀再興の建議がなされ、翌年に官祭として復興が認められ、勅使行列が復活します。更に、祭日も旧暦四月の中酉の日から新暦の五月十五日に改められました。

しかし、第二次世界大戦の苛烈化に伴い、昭和十八年（一九四三）、路頭の儀は再度中止されました。戦後、昭和二十八年に至って葵祭行列協賛会などの努力で漸く路頭の儀は復興され、昭和三十一年には中世に廃絶した斎王代以下の女人列が復活したのです。また、明治以降途絶えていた下鴨神社の流鏑馬神事は、昭和四十八年の式年遷宮を記念して糺の森流鏑馬神事等保存会が設立され、復活しました。ここに、今日見る葵祭の姿が漸く整つたのです。

## 葵祭の行事

葵祭は、狭義では旧暦四月の中の酉（現在は五月十五日）の路頭の儀を指しますが、広義では賀茂社での前儀とし、全体を指す場合は賀茂祭と言つことにしましょう。それでは、実際にどのような日程で葵祭含む賀茂祭は進行するのか、ご紹介します。

### ◆五月一日 上賀茂神社の競馬足汰式

同月五日の競馬会に出走する馬の確認と予行演習を行います。

### ◆五月三日 下鴨神社の流鏑馬神事

糺の森の馬場で公家装束の射手が騎馬的に矢を射ます。明治までは「騎射」と呼ばれていました。騎射は、賀茂祭の草創期に遡る由緒のある行事でした。

### ◆五月五日 上賀茂神社の競馬会神事

本来は葵祭とは無関係な端午の節句の行事で、旧暦では葵祭の後に行われましたが、節句が新暦の日程に合わされます。菖蒲の根合わせの儀などその後五番の競馬が行われます。元禄の葵祭復興に際して、五代将軍徳川綱吉の生母・桂昌院が寄進した馬具が今日なお使用されています。菖蒲の根合わせの儀などその後五番の競馬が行います。

### ◆五月上旬吉日 下鴨神社の歩射神事

祭の沿道の邪気を祓うための弓矢を用いる神事で、楼門の上に向けて鏑矢を放つ屋越の神事などが行われます。

### ◆五月十五日 葵祭

葵祭は、本来は、宮中の儀、路頭の儀、社頭の儀、還立の儀の四部からなっています。朝、宮中で、天皇が勅使に宣命（特有の和文体で書かれた天皇から神への言葉。現在は祭文と称されています）と幣物（神への捧げ物）を授ける儀式等がありました（宮中の儀）。その後、勅使が行列を整えて御所を出発し賀茂社に向かいます（路頭の儀）。その後、両社で、天皇からの幣物が渡され、宣命が読み上げられ、東游の舞の奉納と馬寮使に牽かれた走馬列の白黒の二匹の御馬を神前で三度引き回す（牽馬の儀）。その後、馬を走らせる走馬の儀が行われました（社頭の儀）。明治以降は、東京に皇居が移されたため、宮中の儀と還立の儀が行われなくなっています。

現在の路頭の儀の行列は、午前十時半に京都御所建礼門前を出発し、下鴨神社を経て、上賀茂神社に至り、両社で社頭の儀を行った後に、解散します。

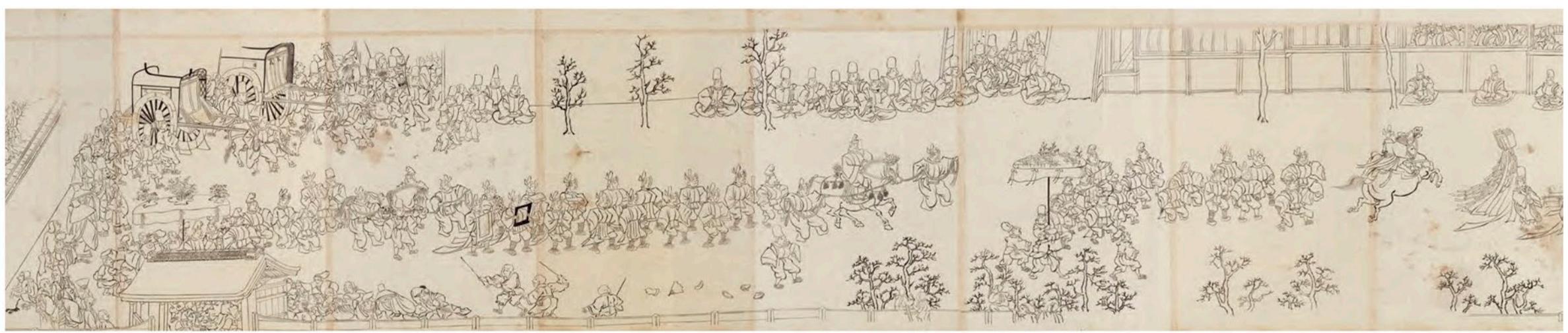
この行列は、五列で構成された五百名余の約一kmに及びます。

第一列 警護列（檢非違使・山城使）  
 第二列 幣物列（御幣櫛・内藏寮史生）  
 第三列 走馬列（走馬・馬寮使）  
 第四列 勅使列（牛車・舞樂人・近衛使・内藏使）  
 第五列 勅使列（斎王代・女人・牛車）

第四列の勅使列が本来の中心です。牛車がありますが、かつて斎王は紫野斎院から出発し、大宮大路を南下、一条大路に突き当たったところで勅使一行と合流して東へ進み、下鴨神社に向かうという順路をとっていました。平安時代以降、勅使は騎馬であり、現在見る姿と近いものでした。また、行列には本物の勅使（宮内庁掌典職）は参加されず、近衛使として代理の扮装者が加わっています。葵祭は、当初は幣物調進に携わる内藏寮が主務を担っていましたが、後に近衛府も勅使に任せられ祭の主役となりました。近衛使は、近衛中将・少将が任せられ、大変な名誉とされました。

また、現在、斎王代は勅使と共に御所から進発しますが、かつて斎王は紫野斎院から出発し、大宮大路を南下、一条大路に突き当たったところで勅使一行と合流して東へ進み、下鴨神社に向かうという順路をとっていました。斎院が廃止された後、当然ながらその行列はなくなりました。しかし、中世廃絶以前、葵祭では、男使である近衛使などに對して、内侍所の使として典侍といつた高级女官も勅使に任じられており、「賀茂の女使」と言われて行列に続いていました。斎院が廃絶した後もこの女使は存続していましたが、元禄の復興では復活されず、戦後に至つてようやく斎王代による女人列が再興されたのです。なお、女人列にも斎王代用の牛車がありますが、斎王代は腰輿に乗御され（①）、そのあとやかな姿を見ることがあります。

こうして、賀茂社に行列が到達すると、両社で社頭の儀が行われます。この儀式は、両社ほぼ共通しています。なお、斎王は、かつて上賀茂神社で社頭の儀を終えると、宮中に帰参する勅使と分かれて、上賀茂神社内の神館に宿泊し、翌日紫野斎院へ戻りました。この行列も、賀茂祭の見せ場の一つで、「祭のかへさ（帰さ・還さ・返）」



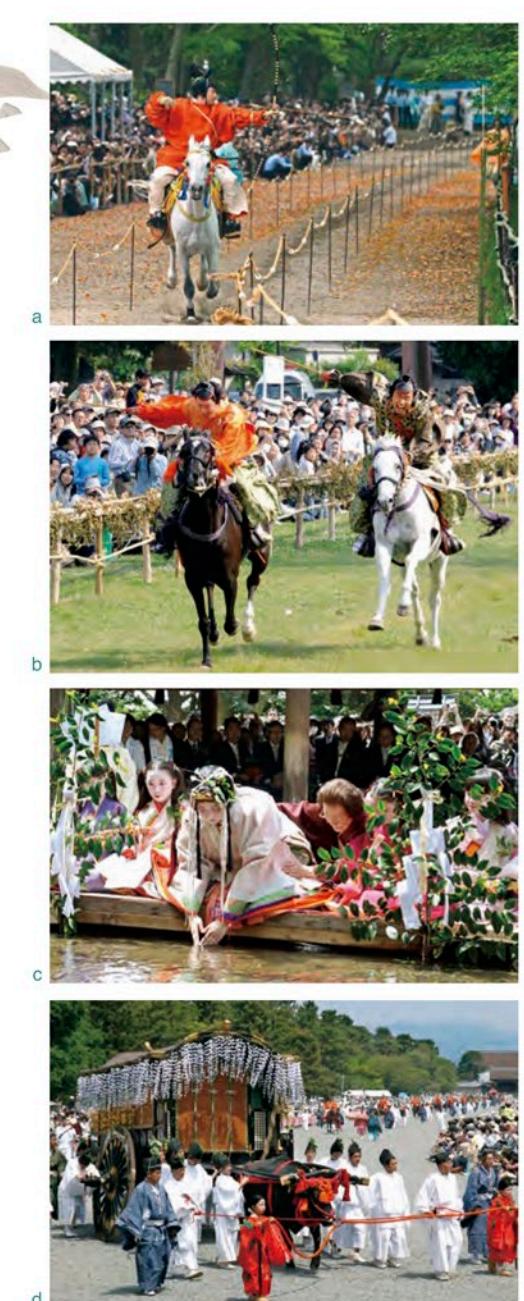
12世紀の行列の様子

▲勅使

▲鳥獣戯画風の賀茂競馬のジオラマがついた風流傘

▲後方に見物のための桟敷席

年中行事絵巻模本



（『枕草子』等）と呼ばれて見物人で溢れたのでした。なお、戦後の葵祭復興に際しては、協賛事業として五月四日に下鴨神社で献香祭、五月六日に同社で献花祭、五月十七日に両社で献茶祭（上・下社）などが行われ、祭に花を添えています。

## 葵祭と文学

葵祭は、朝廷にとつては重要な年中行事であり、貴族は行列見物のことだけでなく、子孫のためにその準備や行事次第を日記などに書きとどめています。それと同時に、この祭は、平安京の人々にとつて大いなる娯楽でもありました。そのため、様々な文学作品に登場します。

最も葵祭への愛情を示した作品として、清少納言の『枕草子』が挙げられます。文中で頻々と触れており、祭に寄せる高揚した気分や当時の雰囲気を生き生きと伝えてます。清少納言が特に愛したのは、「祭のかへさ」でした。葵祭の翌日、上賀茂神社から紫野斎院に戻る斎王の行列の見物です。「見るものは行幸、祭のかへさ、御賀茂詣（中略）祭のかへさいみじうをかし」と述べています。

この祭のかえさは、葵祭と同じくらい人気があつたようだ、「今昔物語集」巻二十八第二「頼光の郎等共、紫野に物見たる語」に興味深い逸話が残されています。酒呑童子を討つことで知られる源頼光の家臣である坂田公時（金太郎のモデルと言われています）ら名うての荒武者三名が、この祭のかえさを見るために人から牛車を借りて行つたのですが、乗り慣れない牛車に散々な目にあつた一行は車酔いでぐつたりしているうちに、行列を見過ごしてしまったというのです。荒武者すら、目にしようと思つた斎院の華やかな行列はどのようなものだったのでしょうか。

次いで、最も著名なものとして、紫式部『源氏物語』葵巻がありましよう。あまりにも有名な賀茂祭における車争の場面（表紙）が登場します。高貴で知性豊かな六条御息所（故皇太子の妃）は、年下の美しい光源氏と恋愛関係に陥ります。しかし、その年上という引け目とブライドが邪魔をして素直に甘えることができず、激しい愛とは裏腹に光源氏との距離は広がり、それが懊惱と嫉妬になります。御息所はその気持ちを散するため牛車で賀茂祭をお忍びで見物に出かけましたが、この後、光源氏の正妻である葵の上の一行がやつてきます。そして、見物場所を巡つて、使用人の間で諍いがあり、御息所の車は散々な辱めを受け、引き下がりました。お忍びのことで御息所は事を構えるわけにもいかず、しかし薄々こちらの身分を知りつつ使用人の狼藉を看過した葵

の上に對して、御息所の心は屈折します。その思いは、はからずも生靈となつてお産を迎えていた葵の上を取り殺してしまいました。御息所は、おのれの業の深さにおのき悩み、斎宮に任せられた自分の娘と一緒に伊勢に下り、ついに恋愛の執着を断ち、狭き門をくぐり抜けた一個の人格が確立するのです。『源氏物語』は表面的にはふしだらな恋愛小説に見えますが、この迫真的心理描写はまことにしばらくしく、これがシェークスピアよりも古い作であるということにただただ驚かされます。なお、『源氏物語』藤裏葉巻では、あの車争から二十余年後、光源氏は、後妻の紫の上と葵祭の見物に出かけ、六条御息所の一件を後味の悪い思いで回想しています。

それ故でしょうか。『源氏物語』葵巻は古くから非常に愛され、絵画・文学でしばしば題材とされました。特に、能の葵上は、代表的な演目の一つとして知られています。ちなみに、六条御息所が見物に出かけたのは、葵祭の行列（路頭の儀）ではありません。これは、桐壺帝の女三宮が斎院に卜定された後の初斎院御禊という重儀だつたのです。この時の行列に桐壺帝の実子である光源氏が勅使として供奉を特に命じられたので、六条御息所はその晴れの姿を一日見ようとしたのでした。なんとも切ない話です。

その他にも、和歌や物語には葵祭を題材としたものはたくさんありますが、最後に吉田兼好の『徒然草』をご紹介しましょう。第四十一段では賀茂競馬を見物に行つた時のエピソードが、第百三十七段と第百三十八段では葵祭の雜踏と祭の後のわびしさがしみじみと綴られています。

古典に親しむと、日本美術を見る楽しみは広がります。古典は、昔の人の一般教養であり、美術のイメージの源泉だつたのです。近代以降もすぐれた文学者が名作の現代語訳に挑戦しています。『源氏物語』などは、与謝野晶子・谷崎潤一郎など錚々たる作家が手がけています。皆さんも現代語訳でもいいので色々お読みになつてしまががでしようか。



## The Aoi Festival: A Thousand-Year Tradition

The Aoi Festival, or Aoi Matsuri (or more formally, the Kamo Festival), is one of the Three Great Festivals of Kyoto, along with the Gion Festival and the Festival of Ages (Jidai Matsuri). Since ancient times, it has been held annually at Kyoto's Shimogamo and Kamigamo Shrines on the fifteenth day of May. During the Heian period (794–1185), in the early 800s, the Kamo Festival began to be held by imperial order and was attended imperial envoys, making it the most important festival in the capital. Today, as one of Japan's three court-sponsored festivals (*chokusai*)—along with the festivals Kasuga Festival and Iwashimizu Festival—the Aoi Festival brilliantly conveys the elegance of the Heian capital. Beloved by citizens from every sector of society, the festival has also been the inspiration for numerous episodes in Japanese literature and works of art. This exhibition features works that evoke this age-old annual event, which has been a mainstay of life in Kyoto for over a millennium.

## 葵祭の牛車

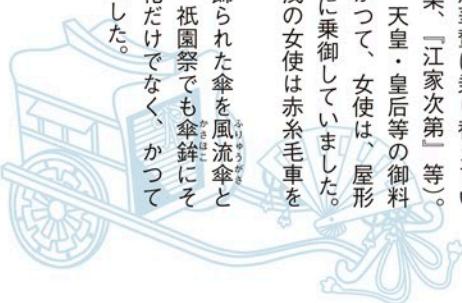
葵祭には、二両の牛車を見ることが出来ます。この牛車は京都御所に保存されており、御所の春秋の一般公開でも展示されることがあります。

勅使列の牛車は、唐庇網代杏葉車というものです。唐庇の車を唐車と言い、最も格式の高い形式でした。上皇・摂関・勅使の料で、これは靈元上皇のものと言われています。本来、勅使は騎馬で、元禄の葵祭再興当初は関白近衛基熙の指示で板輿を用いましたが（『野宮定基日記』元禄七年四月十八日条等）、その後、現在のように唐車が騎馬の勅使とは別に行粧として形式的に用いられるようになりました。

女人列の牛車は、唐庇八葉車です。八葉車は広く使用された形式ですが、ここでは唐庇となっています。また、牛車の前の簾の下を勅使列と比べてください。勅使列では前の簾の下に何もありますが、女人列ではカーテンのようなものがはみ出して垂れています。これは下簾といい、女性が車に乗る場合は出衣といつてこれを前に垂らしたことからきています。

平安時代の斎王は、路頭の儀では葱華輦もしくは牛車に乗御され、牛車の場合は下鴨神社に到着した後、葱華輦に乗り替えていました（『長秋記』大治四年四月二十五日条「江家次第」等）。葱華輦は屋根の頂部に擬宝珠を置いた輿で、天皇・皇后等の御料として最も格式の高いものでした。また、かつて、女使は、屋形全体を色染めした糸で覆った牛車（糸毛車）に乗御していました。糸毛車は色で身分を表していましたが、賀茂の女使は赤糸毛車を用いていました。

## 展示作品一覧



年中行事絵巻模本（葵祭）三巻のうち

車争図屏風 右隻 六曲一双のうち一隻 京都・仁和寺

重要文化財 源氏物語 葵帖

土佐光吉筆 四帖のうち一帖 京都国立博物館

祇園祭礼・賀茂競馬図屏風 左隻 六曲一双のうち一隻

賀茂競馬文様小袖 一領 京都国立博物館

吉野蒔絵三組盤 一式 京都国立博物館

徒然草 中冊 三冊のうち

能面（泥眼）前熊コレクション能楽資料のうち 一面 文化庁

能面（般若）前熊コレクション能楽資料のうち 一面 文化庁

光悦謡本 葵上 前熊コレクション能楽資料のうち 百冊のうち二冊 文化庁

## 賀茂社ご葵

二葉葵（ウマノスズクサ科の多年草）は、上賀茂神社の祭神・賀茂別雷命が降臨された神山一帯に自生していたもので、神草として賀茂社の神紋となっています。葵は、古語では「あひ」と訓じ、その語源は、草が日光を仰ぐようにびくとから「向ふ日」が転じたとする説、神を饗應する日を意味する「饗ふ日」が転じた説、「逢ふ日」に由来するとする説などがあります。

伝説では、天神である賀茂別雷命が、昇天した後、それを慕う母・玉依媛命の夢において「おののまさに吾に逢はむとせば、天羽衣・天羽裳を造り、火を炬き、鉾を祭り待て。また、走馬を飾り、奥山の賢木を取り、阿札を立て、種々の緑色を悉せ、又、葵楓の縷を造り、嚴しく飾りて待て。吾、まさに来たらむとすなり」と告げたといいます（『年中行事秘抄』四月中西日賀茂祭事・賀茂大神条所引「賀茂旧記」、原漢文）。「葵楓」とは、葵桂のこととて、葵を桂の小枝に絡ませて飾りとしたものです。

この夢告に従って、賀茂祭では神招きのため冠の挿頭からはじめて到る所の装飾に葵桂を用いることとなっています。これが「葵祭」の呼称の由来となりました。「枕草子」でも「草は、菖蒲、菰、葵いとをかし。祭のをり、神代よりしてさるかざしとなりけん、いみじうめでたし。物のさまもいとをかし」とあり、清少納言はその神さびた風情を激賞しています。

また、徳川将軍家は、三葉葵を家紋とし、その所縁で賀茂社に庇護を与えたことから、祭に先立つ旧暦四月一日に上賀茂神社に葵を献上する葵使も江戸時代では恒例の行事となっていました。

二葉葵は、かつては上賀茂神社境内周辺に自生、もしくは栽培されており、神山近辺にある上賀茂葵之森町・上賀茂葵田町などの地名に名残を留めています。しかし、二葉葵は、清流のある木陰を好むことから、一帯の都市化が進んだこともあり激減しました。葵祭では毎年一万本以上の二葉葵が使用されますので、その調達には苦心があり、現在では貴船や雲ヶ畠といった鴨川の源流域で自生のものが採取されるほか、関係団体によって栽培事業も展開されています。なお、近世では、賀茂社の末社であった静原神社（京都市左京区静市静原町）の氏子が、静原沙汰人と称され、御蔭祭・葵祭に奉仕しており、周辺地で自生していた葵の奉納もその一環でした（『雍州府志』巻二）。しかし、この奥山の一帯でも葵が急減し、数十年前に奉納が中止されたとのことです。



### 関連土曜講座◆「葵祭の美術」

日 時：5月16日（土）午後1時30時から3時

講 師：大原嘉豊（京都国立博物館主任研究員）

会 場：平成知新館講堂（地下1階）

定 員：200名

（ただし、観覧券が必要です）

※当日12時より平成知新館1階グランドロビーにて整理券を配布します。定員になり次第、整理券配布を終了します。